

Lady Susan の光と影

岡 本 昇

序

Lady Susan は, Jane Austen の作家としては初期のころの, 書簡体小説の最後の作品である。それが何年頃の作品であるかは定かでない。推定では, 1793年~1795年に執筆され, 1805年に書き直されたものとされている。⁽¹⁾ 原本はすべて Steventon から引越す前に書かれたものと考えられ, Marvin Mudrick も Steventon で書かれた可能性を示唆している。⁽²⁾ しかし唯一の証拠は現存の2枚の原稿用紙に残っている1805年の watermark であり, R. W. Chapman はその頃に創作されたものと考えているようである。⁽³⁾ いづれにしてもこの作品は, 彼女の本格的小説の前の過渡期の作品であり, その内容の展開においても, 手法の点でも, 弱点がかなり瞥見される。勿論, Michael Hardwick も言うように,⁽⁴⁾ humor や irony の点でも登場人物の描出の面でも, 秀でた点が多々あることも間違いないことである。この小論は, この作品の光と影の部分を, 前半の「内容の展開」の面から, さらに後半で「技法」の面から考察してみたいとするものである。

主人公 Lady Susan のモデルと考えられる人物として, Mary Augusta Austen Leigh が示唆する Mrs. Lloyd の母親 Mrs. Craven 説がある。⁽⁵⁾ Q. D. Leavis は Austen の最初の従姉である Eliza Hancock をモデルと想定し, 同時に *Mansfield Park* の Mary Crawford も Eliza を source ととっている。⁽⁶⁾ これには B. C. Southam の反論もある。続いて Paul Poplawski は

(1) *Lady Susan* の執筆年については次のような各氏の主張がある。

B. C. Southam, Margaret Drabble, Paul Poplawski... 1793~94年, Deirdre Le Faye... 1794年 A. Walton Litz... 1794~1795年 (Conclusion の部分1805年), William and Richard Austen... 1795年, Mary Lascelles... 1795年 (Conclusion の部分1805年), Marvin Mudrick... 1801年以前

(2) Marvin Mudrick, *Jane Austen—Irony as Defense and Discovery* (Princeton U. P., 1952) p. 140

(3) R. W. Chapman, *Jane Austen; Facts and Problems* (Oxford U. P., 1948) p. 52

(4) Michael Hardwick, *A Guide to Jane Austen* (Charles Scribner's sons, New York 1973) p. 85

(5) R. W. Chapman, p. 52

(6) Q. D. Leavis, *A Critical Theory of Jane Austen's Writings*, ed. by F. R. Leavis, II

Lady Susan と *Mansfield Park* の Crawford Maria のモデルを Eliza としている。⁽⁷⁾ このことから、この作品と *Mansfield Park* の構想を比較しながら両者の相違点も考えてみたいと思う。

テキストは R. W. Chapman 校訂の *The Novels of Jane Austen: Minor Works* (Oxford University Press, 1988) による。以下この作品からの引用は、その直後にページをカッコに入れて示す。

I

この作品は41通の書簡文と終末の短い作者の語りから構成されているが、そのうち主人公 Lady Susan と友人 Mrs Johnson の間で交わされるものが16通、Lady Susan と対立する義妹 Mrs Catherine Vernon とその母 Lady De Courcy との間で交わされるものが13通あり、Lady Susan と Mrs Vernon が他の人物との間で発信、着信する書簡を合わせると38通にのぼる。Lady Susan と Mrs Vernon が作品の中心人物であることは間違いない。

Lady Susan は Mr Manawaring, Reginald De Courcy, Sir James Martin とつぎつぎに魅惑し、冷酷無情に、また打算も加えて相手を手玉にとりつつ自己の優位性を誇示し、関係するまわりの多くの者を犠牲にし、悲惨のどん底に落とすことさえ顧みない。自分の娘 Frederica に対しても例外ではない。悪女の権化の如き存在とされながら、彼女の他の多くの作品においてみられる主人公のように劇的な変心・変容もない。Paul Popawski は Lady Susan を eponymous heroine あるいは antiheroine と位置づける。⁽⁸⁾ 悪女の典型として描かれている。一方 Lady Susan は一種魅惑的女性で大変 wit に富んだ人物として描かれる。彼女は私欲を追求する不謹慎なやり方で遺憾であるが、同じ程度に雄弁とその大胆な謀略で評価される人物である。Letter 16 の彼女の Mrs Johnsonn に宛てた文で “This is one sort of love—but I confess it does not particularly recommend itself to me.... Those women are inexcusable who forget what is due to themselves & the opinion of the World.” (p.269), 同じく Letter 25 の “My remaining here... to all your connections.” (p. 293) は正に彼女の雄弁のくだけりである。彼女自身 Letter 16 で “If I am vain of anything, it is of my eloquence.” (p. 268) と述べている。Lady Susan の美貌と魅力については、Mrs Vernon できえ Letter 6 で述べる。

“I must for my own part declare that I have seldom seen so lovely a Woman as Lady Susan. She is delicately fair, with fine grey eyes & dark eyelashes; & from her appearance one would not suppose her more than five & twenty, tho’ she must in fact be ten years older. I was certainly not disposed to admire her, tho’ always hearing she was beautiful; but I cannot help feeling that she possesses an uncommon union of Symmetry,

(Cambridge, 1968) p. 33

(7) Paul Poplawski, *A Jane Austen Encyclopedia* (Greenwood Press, 1998) p. 156

(8) Paul Poplawski, p. 303

Brilliancy and Grace. Her address to me was so gentle, frank & even affectionate...”
(p. 251)

書簡の視点は一人称である。主役は「善人」である必要はなく、「悪人」であってよい。悪役ならば、一人称で彼女自身の視点で自分を表現すると効果的である。一人称は「善人」より「悪人」の方が似合っている。「悪人」に自己主張・自己弁護させるなら、そこに格好のアイロニーが生まれる。彼女は自分の言葉で自分の悪党ぶりを暴露してくれる。しおらしく Reginald に詫げる Reginald に宛てた Letter 30 と、Reginald を棄てている彼女の本音を語る友人 Mrs. Johnson に宛てた Letter 31 の一人称で述べる彼女の主張との対照が絶妙のアイロニーをみせ主役にふさわしい存在感を与えてくれる。R. H. Hutton 氏は “Lady Susan herself, who is the only person of any interest in the tale, is not simply, a flirt, she is a bad woman of a good deal of ability, ... false and cruel, as well as extravagantly fond of admiration...”⁽⁹⁾ と述べる。確かに悪女としての Lady Susan はよく描かれており、この作品の光りの部分といえる。

一方 Mrs. Vernon は常識派で社会的良識を代表する。Lady Susan といえども、容易に押さえることも操ることもできない、性格の強さを持つ。彼女は決して Susan の策略に乗ることはない。むしろ Susan に決然と対抗し、antiheroine の Susan に対し作品の中では一方の heroine としての資格を持つ⁽¹⁰⁾。彼女の書簡の中で読者への情報提供の役割をはたし、如何にも読者の声を代弁するように問いかけとか抗議を行い、世俗性を代表しているかのようにみえる⁽¹⁰⁾。Lady Susan の面前でも、時には魔力の如き力を発揮する。しかし生き生きとした人間性は見えてこない。Lady Susan には欠けている娘への対応に対し、献身的に行き届いた配慮を行い妻、姉、母親としても面倒見は抜群である。けれども読者は、どこか抑圧されたもどかしい女性としての印象を禁じ得ない。それは対照的に Lady Susan の闊達な人間性を浮上させるのである。Mrs Vernon の役割も作品の中で周到に計算されたものと言える。この両者の対照・対決がこの作品の大きなテーマとなっている。

Lady De Courcy は Mrs Vernon の情報の受け止め役であるが、ひたすら子供達を遠くからやきもき心配するだけの女性で人間性は曖昧である。これに対し Mrs Alicia Johnson は Lady Susan と17通の書簡をかわす Susan の親友であり、彼女には Susan も正直に率直に思いを書き送るので、Susan の表向きの他人への行動の裏付けとなる内情、心理、感情の動きを読者に知らせる媒体となるが、最後には Lady Susan と決別するなど人間性も見え、やや round な人物となっている。

Frederica Susanna Vernon は母親の Lady Susan に放置され、真の愛情には薄く、時に残酷

(9) R. H. Hutton, p. 891

(10) Paul Poplawski, p. 303

に扱われる少女である。おどおどして、一面頑固で気の強い側面もある。Vermon 家は彼女を優しく扱い、少しずつ生き生きとした愛らしい面を見せるようになる。Mrs Vernon は Susan の Frederica に対する冷たい仕打ちに益々 Susan に反感を持つようになる。母親 Susan は彼女と Sir. James Martin との結婚を望むが、彼女は反発している。何かと母から嚇かされているが勇気のある面も持ち、学校の寮から逃亡し Reginald に救いを求める。Vermon 家に滞在する間に Reginald と恋におち、最後には Vermon 家に迎えられ彼と結ばれることになる。作者は不遇であった彼女に最後に幸せを与え、story の中ではただ一つの救いとなる。

以上の女性達に対し男性群は、作品の中で人物描写の面で弱く影が薄い。Lady Susan を追いかける恋人達も、自ら書簡を出したのは Reginald だけで四通のみである。

Mr Manwaring は Lady Susan が Longford に滞在中からの恋人で、Susan に捨てられても彼女が忘れられず、Churchill また London へと彼女を追っていく。Susan も、もし彼が自由な身であったら、あるいは結婚まで至ったかと思えるほど、彼を他の男性より好んでいたと思われる。(Letter 16) しかし彼が発信した書簡は一通もない。他の書簡から知られるだけの人物である。

De Courcy Reginald は De Courcy 家の長男で美德の人とされ、handsome, lively, clever な男性である。彼と読者の出会いは彼が23歳の時である。彼はたわいもなく Lady Susan に惑わされ彼女の熱烈な信奉者となる。外の情報から何度も彼女には懐疑的になるが、その都度 Susan の魅惑には屈せざるを得ない。この間、姉 Mrs Vernon の勧めで Frederica の愛を受ける立場になる。最後には Lady Susan の実像に目覚め、Frederica と結ばれることになる。男性の中では中心的人物だが人物描写は弱いように思われる。発信する書簡が四通のみで彼の心理が読者に見えないからでもある。

Sir James Martin は資産家であるが、軟弱であり軽薄でよくしゃべる男性とされる。Longford で Susan は Miss Manwaring と切り離すために彼に言い寄りあやつり、娘 Frederica との結婚を企む。Frederica は反発し母 Susan の思いを拒絶する。最後には、意外にも Lady Susan が彼を Miss Manwaring から奪い、彼女自身が資産をねらって結婚することになる。Lady Susan との結婚が意外、唐突と思える程、影が薄く表に描かれていない人物である。

以上の登場人物からみて、人物配置は単調で女性中心となっている。人物描写が生きているのは Lady Susan 以外では Mrs Vernon までで、他は迫力がない。書簡体小説の限界であろうか、作者が若く後期の作品の準備期のためであろうか光と影が交錯する。

II

書簡体小説では視点が複雑で定まらない。発信者がそれぞれ視点となるからである。状況・背景等の事実関係は視点が何処にあらうとさして大きな違いはないであろう。しかし人物の心理や内情等は視点によって違う面をみせる。かくて Lady Susan の情事、Frederica の処遇、

Mrs Vernon との葛藤は、Lady Susan を視点とする Mrs Johnson との書簡と、Mrs Vernon を視点とする母 Lady De Courcy との書簡等で読者に知らされる。そこに視点の移動がある。全知は読者のみとなる。ここから plot の全貌を述べる。

lady Susan Vernon は夫の死後約 4 カ月後から Longford の Manwaring 家に身を寄せている。Manwaring 家は陽気な家庭ではあるが、彼女と Mr Manwaring との関係から Mrs Manwaring の嫉妬もあり折合いはよくない状態である。

彼女は義弟 Mr Vernon に手紙を書き (Letter 1), Churchill 在住の Vernon 家に移ることになる。彼女は引っ越し日を待ち遠しく思うが、娘 Frederica のことだけが心配で、London の private school に入れることになる。この間の心情を Mrs Johnson に発信し、(Letter 2) 「Longford の女性達は皆 反 Susan で手を結んでいる」と言う。一方 Churchill では、Mrs Vernon だけは Susan を受け入れることに不服、家族が計画中の母親へのクリスマス訪問が不可能になると、夫 Charles Vernon の過剰な未亡人への親切だと告げる。(Letter 3) Reginald も Lonford における Lady Susan の邪恋な行状について、Manwaring 家の近くに住む Mr Smith から聞き及んでいると言う。(Letter 4)

その中で Lady Susan は Churchill に移住、Mrs Johnson に Vernon 家の優雅で裕福な様子、夫人の丁寧だが歓迎していない態度について報告。自分は皆に好まれるように努めたいし、Vernon 家の子供達へも心を向けたい旨伝える。(Letter 5) Mrs Vernon は Lady Susan の印象について言われている程悪い人ではないように思えると Reginald に述べる。(Letter 6) Reginald が Churchill に到着、Lady Susan も退屈を脱却、彼を魅惑することで楽しもうという気になる。そうすることで De Courcy 家のプライドに対する彼女の魅力の優越性を誇示しようとするのである。Letter 8 によれば、彼女は短期間でそのことに成功をおさめている。Reginald がぞっこん Susan にひかれており、彼女がしっかりと彼を虜にしていることは明らかである。Mrs Johnson は Susan に資産家の彼との結婚をすすめる。Sir James Martin も Susan か Frederica と結婚したがっていると言う。(Letter 9) Lady Susan はお金に不自由しているわけでもなく、むしろ自由を選びたいと、彼女の唯一のねらいは彼と彼の家族に屈辱を与えることにあると伝える。(Letter 10) Mrs Johnson との交信で Susan のコケット、浮気性が明らかにされる。

Mrs Vernon は母に、Reginald が Susan に首っただけである状態についての不安を伝える。(Letter 11) ところが運悪く父親 Sir Reginald がこの手紙を読むところとなり、叱責の手紙を Reginald に送る。Reginald は結婚の意志はないが、Lady Susan の能力と人柄を賞賛し誤解を解こうとする返事を送る。(Letter 14) Susan は Frederica が学校から逃げ出したとの知らせを受ける。それが Martin と結婚させようとする母親の執着に対する抵抗だと Susan は受け止める。Frederica は Churchill に連れかえられる。Martin が不意に Vernon 家を訪問し、Susan の、彼と Frederica との結婚の意図を、Vernon 家に知らしめることとなるが、それは失敗に終

わり、Martin も Churchill を去る。Susan は Frederica とロンドンを訪ねることになる。

ここからクライマックスに入る。Reginald の Johnson 家訪問と Mrs Manwaring の到着がぶつかる。Mrs Manwaring の悪口を聞いて、Reginald は Lady Susan の魔力は消え去ったと Lady Susan に伝える。彼女が Mr Manwaring と文通していたことや、Mr Manwaring が彼女のロンドンの住まいを訪問していたことを聞き Reginald はついに決意するのである。Lady Susan もここに至り威厳と軽蔑を含めて Reginald に決別を告げる。Mrs Johnson も夫から「これ以上 Lady Susan との付き合いを続けるなら、自分はお前の元を去り一生田舎で過ごす」と言われ、ついに二人の女性の長い友情にも終焉が来る。

最後にこの作品には、“conclusion”として後から付け足した作者自身の後書きが入る。この部分のみ書簡体をとっていない。

それぞれの文通はほとんど遠のき、あるいは断絶してしまう。Frederica は母とロンドンに住んでいたが、Vernon 家は Lady Susan の母親としての不適確性を確信し、彼女を引き取るように働きかける。インフルエンザの流行につけこみ、ついに Lady Susan が折れて Frederica は Vernon 家に行くことになる。その三週間後 Lady Susan は突然 James Martin と結婚したことを公にする。Frederica の Churchill 在住は、六週間で二カ月になっても、更に二カ月経っても続き、ついに Lady Susan からの帰って来るようにと促す手紙も途絶えてしまう。Frederica は Reginald の愛を受けることとなる。

以上のプロットを視点別（発信者別）に整理してみる。

視点 (発信者)	L. Susan	Mrs Vernon	Mrs Johnson	L. D. Courcy	Reginald	S. Reginald	Frederica
Letter							
1 着信者	Mr Vernon						
2	Mrs Johnson						
3		L. D. Courcy					
4					Mrs Vernon		
5	Mrs Johnson						
6							
7	Mrs Johnson						
8		L. D. Courcy					
9			L. Susan				
10	Mrs Johnson						
11		L. D. Courcy					
12						Reginald	
13				Mrs Vernon			

Lady Susan の光と影

14					S. Reginald		
15			L. D. Courcy				
16		Mrs Johnson					
17			L. D. Courcy				
18			L. D. Courcy				
19		Mrs Johnson					
20			L. D. Courcy				
21							Reginald
22		Mrs Johnson					
23			L. D. Courcy				
24			L. D. Courcy				
25		Mrs Johnson					
26				L. Susan			
27			L. D. Courcy				
28				L. Susan			
29		Mrs Johnson					
30		Reginald					
31		Mrs Johnson					
32				L. Susan			
33		Mrs Johnson					
34					L. Susan		
35		Reginald					
36					L. Susan		
37		Reginald					
38				L. Susan			
39		Mrs Johnson					
40					Mrs Vernon		
41			L. D. Courcy				
計	16	12	5	2	4	1	1
Conclusion (Author)							

以上の書簡群からこの作品のいくつかの特徴をあげてみる。

発信した書簡数を男女で分けてみると、男性5通に対し女性36通である。作品全体がほぼ女性の視点から書かれていることがわかる。男性の手紙がほとんど淡泊で事実とか意見を伝える

のみにとどまるのに対し、女性の手紙は生の感性の言葉で語られ、後述するように書簡の中に盛んに作者得意の会話体が挿入されていて、人間を描きだしている。特に Lady Susan については、義妹 Mrs Vernon に宛てた書簡が示す「表」の部分の「外観」と、親友 Mrs Johnson に宛てた書簡が示す「裏」の部分の「精神構造——内実」との較差を対照的に表現し、彼女のエゴイズムと偽善の様相が見事に描出されている。Oliver MacDonagh は Susan の悪女としての魅力について、“Without going to the length of regarding the villainess of Lady Susan, Lady Susan Vernon, as a heroine disguised, we can certainly speak of her role as heroic in the same sense as Lucifer’s in Paradise Lost. Lady Susan is uniformly malevolent, invariably choosing the heartless, selfish or evil course, though masking it generally by the opposite pose. Yet the very invariability of her malignity anaesthetizes the reader’s hostility.”… “Most telling of all, she is physically and intellectually attractive in a high degree.”⁽¹¹⁾ と彼女の変わらぬ悪意がかえって読者を麻痺して敵意を喪失させる。総じて彼女は身体の美しさの面でも、知的な面でも非常に魅力的な人物といえるとしている。さらに、“Despite the ultimate thwarting of Lady Susan’s full design, the novel as a whole seems to celebrate female power. Its leitmotif is Lady Susan’s obsession with subduing men. Nor has she any intention of submitting to reciprocal enslavement. Although she is sexually attracted to Manwaring, this is a mere occasional indulgence and in no way her motivating force. It is dominion, virtually for its own sake, which she desires, and it is by ‘feminine’ weapons that she masters her ‘opponents’.” と述べ、この作品が Lady Susan を中心に女性優位の展開となっているとし、作品の主題が「Lady Susan の、男性を征服することへの執念」にあるとまで言い、彼女が望むのは男性におぼれることではなく、その「支配」のみであり、相手を征服するのは、彼女の持つ女性の武器によるのだと主張する。⁽¹²⁾ まさに、女性優位の構造と言える。

その特徴ある女性達をそれぞれ観察すれば、Lady Susan は artificial で作者が意図的に創造した、現実にはあまり存在しないタイプの典型としての人物で所作にも恣意性がある。Frederica は natural な極く普通の、周囲の人達によって保護される、環境に支配されやすい人物である。ただ母親 Susan にだけは抵抗し自分を主張する場面を加え筋の展開に寄与し、作品の中で男性では唯一 Reginald と共に脇役ながら重要な役割を果たす。しかし発信する書簡は極めて少なく外側から見られているだけである。Mrs Vernon は「世俗」を代表する人物で慣習を重視する。筋の進展の reporter 役を果たす。後期の本格的小説にみられるような「成長していく女性」の痕跡は見られない。確かにこの作品は初期のものとしては出色のものであろうが、

(11) Oliver Macdonagh, *Jane Austen—Real and Imagined Worlds* (Yale UP 1991) p. 21

(12) *ibid.* p. 27

登場する人物の多様性とか筋の複雑さにかけては後期の作品に比すると粗削りのものであろう。Marvin Mudrick は述べる。“The book (i. e. *Lady Susan*) is in many ways a culmination of Jane Austen’s early period. It compresses and sums up the glittering, analytic, detached, but rather rambling and literary irony of the juvenilia and *Northanger Abbey*; it cuts to the social foundation which *Pride and Prejudice* implies; it bypasses the forced priggishness in *Sense and Sensibility*. . . and if it matches neither of the latter two novels in diversity of characters and complexity of development, it almost certainly did not receive the extensive and frequent revisions to which the author submitted both of the others until their publication half a dozen years or more after *Lady Susan* was laid aside in its enigmatic fair copy.”⁽¹³⁾ とこの作品が初期の傑作であることはみとめても、粗削りのところがあ
り後期の作品のように何度も改訂されてないのは残念であるとしている。

Lady Susan という人物は Austen にとって、その時代の男性中心の社会にあって、彼女がある描きたかった一人の理想の女性であったのかも知れない。Susan は自己の本心を隠し、見せかけで演技できる天才であった。彼女は必要とされるどんな役割も演ずることができた。何故なら彼女の世界は創造された artificial な世界であり、自然の感情の支配する世界ではないからである。彼女は周囲の人達に対し大変な優位性をもって対応できるように仕立てられていた。自分の生き方を通し変容もせず自己欺瞞もなかった。A. Walton Litz は述べる。“Lady Susan is too consistently herself to be believable in the world of Jane Austen’s other works; she would be out of place in any of the novels, for she is the only character in Jane Austen’s fiction who is completely free of self-deception and illusion. It is as if Jane Austen, possessed by the need to present an amoral woman of the world, could not find in the society she knew the proper manners to clothe her creation, and therefore borrowed them from the literature of earlier decades. For it is the strength of Jane Austen’s art that as she matured and her observation widened, she realized that women like Lady Susan are ideal creations, perhaps as far removed from reality as the Man of Feeling, and that no believ-
able character would be so self-assured and so free from illusion.”⁽¹⁴⁾

III

この作品の技法面について論を続ける。Austen の作風の特徴であり、彼女の諸作品を傑作に高めたものの一つは、その生き生きとした種類の会話体であると言える。R. H. Hutton は言う。“Dialogue was of the very life of her genius, which was really free in its kind, though so

(13) Marvin Mudrick, p. 139

(14) A Walton Litz, *Jane Austen—A Study of Her Artistic Development* (Chatto And Windus 1965) p. 41

minute...”⁽¹⁵⁾そして会話体が自由に使えない書簡体小説の *Lady Susan* について “Lady Susan is a failure, because, with a perversity not uncommon in young genius just groping its way to the comprehension of its own powers, Miss Austen had committed the double error of choosing a subject which required a bolder style than hers, and of fettering herself in its treatment by a method which robbed her style of its greatest grace as well as power.”⁽¹⁶⁾しかし書簡体にも「強み」があり、Jane Austen も書簡体に自信をもっていたことは事実である。Jane Austen は1801年1月3日、姉の Cassandra に宛て、“I have now attained the true art of letter writing, which we are always told, is to express on paper exactly what one would say to the same person by word of mouth.”⁽¹⁷⁾と言っている。

書簡は語りでいえば独白である。そこで相手（書簡の受取人）によって内容（事実の説明・解釈等）に変化をつけることが可能となる。*Lady Susan* はこの術を巧みに使い分けて読者に自分の外面と内実を明らかにし、それが *Lady Susan* の人物描写を深める働きをしている。即ち、外面については *Lady Susan* を観察している Mrs Vernon 等の手紙を借り、内実面は親友 Mrs Johnson への手紙で伝えられていくのである。前者は彼女がまわりの人を意識して表現している人工的に作り出された自己であり、後者はそれらの外面の奥に隠された内奥の真実である。この結果、彼女の性格の複雑さと心理が、効果的に手紙に組み合わせられて表現されていくのである。例えば Letter 30 では、形式的な散文形式を使って真実迫る外面で、いかにも Reginald を愛してはいるけれども、現在は Reginald の激しい愛を受け入れられない事情を、大袈裟な感情の高まりを見せて吐露するが、すぐその後の Letter 31 では、友人 Mrs Johnson に宛てて、しっこい Reginald を揶揄し、彼をつきはなしてしまっている内心を、極めて直接的な口語的な表現で伝えている。その文体から、これが彼女の本心であることが解り、Reginald の純なる気持ちをもてあそび操っている悪女ぶりを表現しているのである。こうして本来の書簡体小説にありがちな冗長な繰り返しが、巧みにニュアンスの変わる二つの手紙の「合わせ技」によってかわされ、逆に深みを増していく。

Letter 24 と Letter 25 の組み合わせでは、Letter 24 において、Reginald が *Lady Susan* の衣装部屋に入って行く場面で、二人が重要と思える会話を交わした後、出て来る所を Mrs Vernon と Frederica に見られる。直後 Reginald は、予定を急変して Vernon 家に残ると言う。*Susan* と仲たがいで Vernon 家を出て行く事を期待していた Mrs Vernon は、こんなはずではなかったと大変な落胆をする。Reginald はすっかり *Susan* にまるめこまれ、*Susan* を理解する側になってしまっている。その後 *Susan* と Mrs Vernon の対決があるが、*Susan* のお手並みに Mrs Vernon はたじたじで、意気投合した Reginald と *Susan* が結婚するのではないかと心

(15) R. H. Hutton, “Miss Austen’s Posthumous Pieces” (*Spectator*, 22 July 1871) p. 892

(16) *ibid.* p. 892

(17) R. W. Chapman ed., *Jane Austen’s Letters* (Oxford U. P., 1932) p. 102

痛している。二人だけで衣装部屋において何が話されたかは不明のままである。

ところが Letter 25 で解るのは、Lady Susan の Reginald に対する心情は単純一筋のもではなく、むしろ Reginald を許していない立場である。ここで衣装部屋で話された内容の詳細が明らかになる。それは卓越した Lady Susan の雄弁でもあった。Reginald よりも自分 Susan の方こそ当家を出て行くべきだと言う筋で、Reginald を納得させ心服させてしまうのである。そして Lady Susan の本心は次のように表れる。彼女の雄弁な説得の後、“It’s effect on Reginald justifies some portion of vanity, for it was no less favourable than instantaneous. Oh! how delightful it was, to watch the variations of his Countenance while I spoke, to see the struggle between returning Tenderness & the remains of Displeasure. There is something agreeable in feelings so easily worked on. Not that I would envy him their possession, nor would for the world have such myself, but they are very convenient when one wishes to influence the passions of another. And yet this Reginald, whom a very few words from me softened at once into the utmost submission, & rendered more tractable, more attached, more devoted than ever, would have left me in the first angry swelling of his proud heart, without designing to seek an explanation!” (p. 293)

「レジナルドに及ぼしたその効果は私の虚栄をいくぶんか正当化してくれました。というのも、その効果はすぐに、しかも好都合な具合に現れたからです。ああ、なんという喜びだったのでしょうか。私は自分が話している間中、彼の表情が移ろい、変わっていくのを見て、甦ってきた優しさと、まだ燻り続けている不快感とが互いにせめぎ合っているのを眺めていたのです。あんなにお手軽に操られてしまう感受性ってなんだかいいですね。それが羨ましいというのではなく、また私自身、そんなものを持ちたいとも思ってはいませんが、そういう類いの感受性って、人の激情を左右し、手玉にとりたい場合には願ってもない好都合なものとなるのです。でも、このレジナルドが、ほんの二、三、言葉をかけてやっただけで、すぐさまほとんどひれ伏さんばかりに心を蕩かし、そしていままでなかったほど手なずけられ、魅せられ、献身的になっているこのレジナルドが、最初、旋毛を曲げたときには、身を低くして説明を乞うこともしないで、自分の高慢ちきな心が増長するにまかせ、私から立ち去るつもりでいたのです。」⁽¹⁸⁾

既に本心では Lady Susan は Reginald を高所から見下ろし、見捨てており、手玉にとろうとしている。しかし Letter 24 では「表」の Lady Susan の顔として、Reginald を心酔させ納得させているのである。

次にこの作品の一つの特徴は、随所に見られる書簡の中の「対話」である。Letter 20, 23, 24 で目立ち、特に Letter 24 ではそれが頻出し、いかにも後期の作品を彷彿させるような劇的構成

(18) 惣谷美智子訳著、『オースティン「レイディ・スーザン」——書簡体小説の悪女をめぐる』(英宝社 1995) pp. 115-16

で書簡の割りには臨場感を出している。

At that moment, how great was my astonishment at seeing Reginald come out of Lady Susan's Dressing room. My heart misgave me instantly. His confusion on seeing me was very evident. Frederica immediately disappeared. "Are you going?" said I. You will find Mr Vernon in his own room." "No Catherine, replied he. "I am not going. Will you let me speak to you a moment?" (p. 287)

「その瞬間なのです。レジナルドがレイディ・スーザンの衣装部屋から出てきたのです。それを見た私の驚きはいかばかりだったでしょう。とたん、ぎくりとしました。私を見た弟の狼狽ぶりは見間違いようもなかったのです。フレデリカは時を移さず姿を消しました。『出発するのですか』と私はいいました。『ヴァーノン氏はお部屋ですよ』『いいえ、キャサリン』と弟は答えたのです。『出発はしません。ちょっとお話があるのですが』⁽¹⁹⁾」

Reginald が Lady Susan の衣装部屋から出て来た直後の姿を Mrs Vernon が見た情景が、書簡にしては対話を交えてよく表現されている。

その後 Lady Susan と Mrs Vernon の、Frederica と Reginald をめぐる丁々発止の激しい会話のやりとりが続く。一連の Lady Susan の発言を聞いた後で Mrs Vernon が述べる。

"I could have said, 'Not much indeed';... but I left her almost in silence. It was the greatest stretch of Forbearance I could practise." (p. 291)

「『本当に、それほどじゃありませんわ』といってもよかったのですが……でも、私はほとんど黙って彼女を放っておきました。それが私にできた精一杯の我慢でした。⁽²⁰⁾」

このように Mrs Vernon の口には出されなかった心の中の言葉まで quotation marks を付して出てくる。巧みな心理の表現である。

それぞれの人物の発信する書簡の中から、使用されている目立った語(句)を検討しその傾向を見る。Lady Susan の発信する書簡では、convince または conviction 10回、resolve または resolution 6回、determine 4回、persuade 3回、provoke 2回、refuse、insist、allow、induce、avoid、absolutely、assure、disconcert、disapprove、impress、flatter oneself、have no difficulty in と積極性を示す語彙が多い。Mrs vernon の発信するものでは、be persuaded 5回(別に persuade+他人 が1回)、be convinced または conviction 6回、not be able to、I wish、I might probably be、Little did I dream、probability、I'm sorry、unconvinced、be disposed、be unwilling to、forbearance、cannot helping、at the mercy of と慎重・受動的言辭が目立つ。Frederica は書簡一通のみであるが、be ashamed to、miserable、be forbidden、I'm afraid、be obliged to、apologise、be forced と消極性を示す語句が並んでいる。作品全体

(19) 同書, p. 102-03

(20) 同書, p. 111

では convince, conviction が最も多く、計20回使用されている。全体的に語彙は figurative なものは少ない。

田辺昌美氏は persuasion, persuadable, persuasive, persuading, などを含めて 'to persuade' とりわけ 'be persuaded' という形は Austen が最も好み、最もしばしば用いた形の一つで、これらに関する語彙を Austen ほど頻繁に用いた作家はいないと言い、人生とは「我」の主張ではなく、「我」が周囲からの説得をえて生かされているものであるという、深い人生認識にまで彼女が到達しえているように述べ、*Sense and Sensibility* で40回、*Pride and Prejudice* で47回、*Mansfield Park* で46回、*Emma* で60回、*Northanger Abby* で22回、*Persuasion* で29回、この語に関する語句が使用されていると⁽²¹⁾言っている。

Lady Susan は短編ではあるが persuade 及びその派生語は12回使用されている。内訳は Susan が to persuade を3回 (p. 249, p. 250, p. 254), Mrs Vernon が be persuaded を5回 (p. 255, p. 259, p. 277, p. 278, p. 289) 使っており、他に能動態で1回のみ使っている。外に他の人物で3回使われている。この作品では積極的な Susan と、慎重で常識的な Mrs Vernon のような「人物」を描くのに貢献しているように思える。

田辺氏は Austen の6編の大作は「『受動』と『否定』の姿勢による人生の顕現」を目指したものと提言しているが、この後期の作品群に至る以前の作家の初期の作品において、*Lady Susan* のような「積極的能動的」悪女の antiheroine を創造したことは注目される⁽²³⁾ところであり、英国小説史上屈指の喜劇作家へのプロセスが窺えるのである。

書簡体小説は Austen にとって、本格的作家に至る小説作法の演習或いは実験的役割を果たしたとも言えよう。*Pride and Prejudice* にしても、*Emma* にしても、*Mansfield Park* にしても、書簡体が有効に作用し、文体上の多様性に、そして内奥の独白を通じて、より深い人物描写に貢献している。特に *Lady Susan* の手法は、*Mansfield Park* に大きな足跡を残していると言えよう。それは Fanny が郷里 Portsmouth に居りながら Mansfield の実情を知るのは、すべて Mansfield Park 及び London より届く Edmund, Miss Crawford, Lady Bertram 発信の書簡を通じてである。即ち *Mansfield Park* の Epilogue の急転早いペースの Climax に向かう展開は、6本の書簡が大きい役割を果たしている⁽²³⁾と考える。この有効な書簡形式を使う手法は *Lady Susan* の習作が生かされたと言える。*Lady Susan* はほとんど女性中心の、しかも *Lady Susan*—Mrs Johnson, Mrs Vernon—Lady De Courcy の二組の文通が中心で、人物配置もやや単純であるが、*Mansfield Park* では多彩で、書簡も感覚的軽薄なもの、善意と友情の際立つもの、洞察力優れた判断力と教養あるもの等書簡が使い分けられ、筋の進展と人物描写に読者の共感を与えるものとなる。書簡体手法もずっと進歩していることが窺える。

(21) 田辺昌美『ジェイン・オースティンの文学』(あぼろん社, 1965), p. 141-42

(22) 同書, p. 3

(23) 同書, p. 13

登場人物の構成では、*Mansfield Park* の Mary Crawford に Lady Susan の二重写しの影を見る。Mary は明るく魅力にあふれた女性ではあるが、本心は相当な打算的現実的な考えの持ち主で、Edmund が志望する聖職者についての彼女の批判的な考え方にそれがよく表れる。実兄 Henry と Maria との駆け落ちの背徳にも反発する感性は全くない。道義的には、純真無垢で強い道義を貫く主人公 Fanny とは対照的に描かれている。Maria Bertram もまた Susan の行動をなぞるような不義に走って行く。彼女は腹黒い俗物根性の Mrs Norris の影響を強く受けている。男性を裏切る性状で Susan のやり方を実行して見せる。Q. D. Leavis が言い、Norman Page が伝えているように、*Mansfield Park* の構想には *Lady Susan* に下地があるように思える。しかし悪女の典型のような人物として Lady Susan を越えるような人物は見られない。

Austen の世界では、若者の成人後の人となりは道義的なものや愚行を含め、家庭の教育によるところが大きいとする場面が多い。Walter Allen は次のように言って、その時代的背景も問うのである。“In Miss Austen’s world the errors and follies of the young are always, in part at any rate, the result of faulty upbringing;… Why, for instance, was it so wrong for the young Bertrams to perform a play in their father’s absence? To answer the question would be almost to write a book on the period;… she is so constantly right in her judgments of the characters and events in the small world she created that we are convinced that she would be equally right on characters and events in the larger world outside.”

このことは *Mansfield Park* にも *Lady Susan* にも共通したものと言える。Susan の娘 Frederica についても、次のようないくつかの Mrs Vernon の言及がある。

“It must be to her advantage to be separated from her mother; & a girl of sixteen who has received so wretched an education would not be a very desirable companion here.”
(p. 247)

“Frederica must be as much as sixteen, & ought to know better, but from what her Mother insinuates I am afraid she is a perverse girl. She has been sadly neglected however, & her Mother ought to remember it.” (p. 266)

“... ‘During her poor father’s life she was a spoilt child; the severity which it has since been necessary for me to shew, has entirely alienated her affection; neither has she any

(24) Q. D. Leavis, “A Critical Theory of Jane Austen’s Writings, II: *Lady Susan* into *Mansfield Park*”, *Scrutiny*, 10 (Cambridge, 1941) pp. 114-42, 272-94

(25) Norman Page, *The Language of Jane Austen* (Oxford: Basil Blackwell, 1972) p. 180

(26) *Mansfield Park* の作中人物, Tom, Edmund, Maria, Julia

(27) Walter Allen, *The English Novel—A Short Critical History* (Phoenix House, London 1954) pp.106-07

of that Brilliancy of Intellect, that Genius, or Vigour of Mind which will force itself forward.' 'Say rather that she has been unfortunate in her education.'..." (p. 288)

このような Frederica に対する周囲の様々な人々の観察、理解、同情、処遇が、この作品のテーマに対する一つの伏線となっていく。

手法全体では、*Lady Susan* はそのプロットの面でも、人物配置の多様さ、劇的葛藤の面でも、各種対話等の「語り」の面でも、*Mansfield Park* に比して明らかに完成されていない稚拙なところがあり、欠陥も多いように見えることは否めない。それはまた、書簡体だけに頼る小説作法の限界でもある。

結 び

以上述べてきたところから、本作品最大の光の部分は Lady Susan という人物の創造であろう。彼女の徹底した冷酷さ、不快さがこの作品の推進力であり、また Austen の後々の作品の創作活動の力ともなり、原点ともなる人物である。⁽²⁸⁾ Austen の作品に通常見られる、当時のごく自然のままの市民の世界から生まれてきた人物とは違い、芸術的に創出された技巧的なユニークな character の登場である。

この Susan の外観 (outer appearance) と内実の心情 (inner feeling) の完璧な対照がこの作品のモチーフであり、その描出には書簡体が適していたと言える。Mrs Vernon 等の書簡から判明する周りの人々が判断していた「Susan の外観的な社会的人物像」と、Mrs Johnson に宛てた彼女自身の書簡から判明する「Susan の内奥の心情及び意図」との較差は読者に全て明らかにされ、彼女の本当の成功と失敗が浮上し、そこに格好の Dramatic Irony が演出される。それが現実にあるがままの仕業ではなく、技術的に意図的に創造されたものだけに一層芸術性が加わる。

さらに、教区牧師の娘として生まれている Austen が、フランス革命 (1789~99) の最中、従姉 Eliza の夫が革命の犠牲となりギロチンにかけられた当時の世情の中にあって、Lady Susan Vernon 及び Sir Reginald De Courcy, Lady De Courcy, Sir James Martin と Hierarchy (位階制度) を導入し、最後に Lady Susan が資産家の Sir James Martin と結婚するように仕立てているのも興味あるところである。

ところが文体とか「語りの技術」の面となるとやや影が薄くなる。Lady Susan は書簡体小説

(28) A Walton Lits, pp. 41~42

(29) Ibid., pp. 13~44

(30) Ibid., p. 45

(31) Norman Page, p. 172

(32) Ibid., p. 173

(33) Marvin Mudrick, p. 139

(34) Ibid., pp. 138~39

という性格上、様々な制約があることはこれまで述べた通りである。その一つに、視点が複雑であるとしたが、作者はこれはむしろ巧く利用している。ところが年月を経た終章で書簡体を捨て、“Conclusion”を作者の語りで付加する。これはあまりに粗削りで唐突であり不成功に終わっている。A Walter Litz も “... the hasty conclusion... abrupt breaking-off of letters and inadequate Conclusion... hurried tidying-up of the plot... loose ends”⁽²⁹⁾ と不評である。作者の語りとは即ち「作者から読者への書簡」というようにここでは位置づけてもよいのではなかろうか。それは全知の作者からの書簡であり、素早い説明、出来事の後書きとなってしまう、劇的構造は店じまいすることになる。Litz は述べる。“... it should be obvious that “Lady Susan”, in terms of style and narrative technique, is neither as brilliant as “Love and Friendship” nor as promising as “Chatharine”. It is a dead end, an interesting but unsuccessful experiment in a dying form based upon outmoded manners;⁽³⁰⁾

しかし書簡体作法そのものについては、Norman Page も言うように Ausen は卓越したものを持っていたと言える。彼は述べる。“... Quite early in her writing life she must have sensed the capacity of the epistolary novel for dramatic power, vivid immediacy and minute analysis of states of mind... The history of her relationship with the epistolary mode is, therefore, a record of its early use and and gradual abandonment in favour of other narrative techniques, though important traces remain even in the later novels.”⁽³¹⁾

その技法についても次のように認めている。“That is to say, a ‘major’ correspondence (between A and B) is supported by one or more ‘minor’ correspondences ... a pattern we shall see repeated on a larger scale in the later “Lady Susan”,... It is worth noting that these early efforts, and notably the collection of Letters, make frequent use of dialogue.”⁽³²⁾

Lady Susan における Art と Nature の対立・対照が、最後の Conclusion の部分で冷えこんでしまうのは残念であるが、Marvin mudrick も言うように、後期の作品のように更に改訂され書き直されていれば、もっと完成されたものにもなっていたであろう。*Lady Susan* では不明なところもあり多義的ではありながら、「悪」そのものが輝いて見えてくる。それで読者に一つの清涼感を残すのは否めない。それが Ausen の作家としての堂々たるところであろうか。⁽³⁴⁾ Marvin Mudrick も付言しているように、*Lady Susan* は Jane Austen 初期の作品の中で、多くの点で最高の位置を占めるものを持っており、最初に完成した傑作とも言えるだろう。

主なる参考文献

- Allen, Walter, *The English Novel: A Short Critical History* (Phoenix House, 1954)
 Austen-Leigh, *Mary Augusta, Personal Aspects of Jane Austen* (John Murray, 1920)
 Chapman, R. W., *Jane Austen: Facts and Problems* (Oxford University Press, 1948)
 Chapman, R. W. ed., *Jane Austen's Letters* (Oxford University Press, 1932)
 Copeland, Edward and McMaster, Julit, *The Cambridge Companion to Jane Austen* (Cam-

- bridge, 1997)
- Grey, J. David, *The Jane Austen Handbook* (The Athlone Press, 1986)
- Hardwick, Michael, *A Guide to Jane Austen* (Charles Scribner's sons, 1973)
- Hutton, R. H., "Miss Austen's Posthumous Pieces" (*Spectator*, 22 July 1871)
- Leavis Q. D., *A Critical Theory of Jane Austen's Writings* ed. Leavis, F. R. II (Cambridge, 1941)
- Leech, Geoffrey N. & Short, Michael H., *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose* (Longman, 1981)
- Litz, A. Walton, *Jane Austen: A Study of Her Artistic Development* (Chatto and Windus, 1965)
- MacDonagh, Oliver, *Jane Austen: Real and Imagined Worlds* (Yale University Press, 1991)
- Mudrick, Marvin, *Jane Austen: Irony as Defense and Discovery* (Princeton University Press, 1952)
- Page, Norman, *The Language of Jane Austen* (Basil Blackwell, 1972)
- Page, Norman, *Speech in the English Novel* (Macmillan, 1973)
- Poplawski, Paul, *A Jane Austen Encyclopedia* (Greenwood Press, 1998)
- Southam, B. C. ed., *Jane Austen: The Critical Heritage* vol. 2 (Routledge, 1987)
- Tucker, George Holbert, *A Goodly Heritage: A History of Jane Austen's Family* (Carcenet New Press, 1983)
- 三馬志伸, "Propriety and Hierarchy in Jane Austen's Novels" (芸文研究 第73号, 1997)
- 惣谷美智子『オースティン「レイティ・スーザン」——書簡体小説の悪女をめぐる——』(英宝社, 1995)
- 田辺昌美『ジェイン・オースティンの文学』(あぼろん社, 1965)
- 津田塾大学「文学研究」同人『ジェイン・オースティン——小説の研究』(荒竹出版, 1981)
- 直野裕子『ジェイン・オースティンの小説』(開文社出版, 1986)
- 樋口欣三『ジェイン・オースティンの文学——喜劇的ヴィジョンの展開——』(英宝社, 1984)
- 蛭川久康『ジェイン・オースティン』(英潮社, 1977)